

# 湯の川ラボ 一産官学による湯の川再生一

## ■設計趣旨

湯の川から「味覚」という魅力を発信する。再発見の場として湯のラボを設置し全国に発信する。ながい歴史が育ててきた旅館の味は函館の豊富な海産物とともに、貴重な観光資源として新しい観光資源となりうるのではないだろうか。

### 1) あつめる：地理的なポテンシャルを活用

漁火通により水産物を、産業道路により農作物を、年中通して湯の川にあつめる。また函館市電が通り、函館空港が隣接する立地を生かし観光客を呼び込む。湯の川はこれら豊富な交通網の結節点である。

### 2) うみだす：ひとつの場所で刺激しあう

地域住民がおとずれる湯の川支所、旅館が料理を提供する湯の川レストラン、学生がまちづくりやイベントをおこなうまちづくり研究所を併設させ産官学連携をおこない魅力を再発見する。

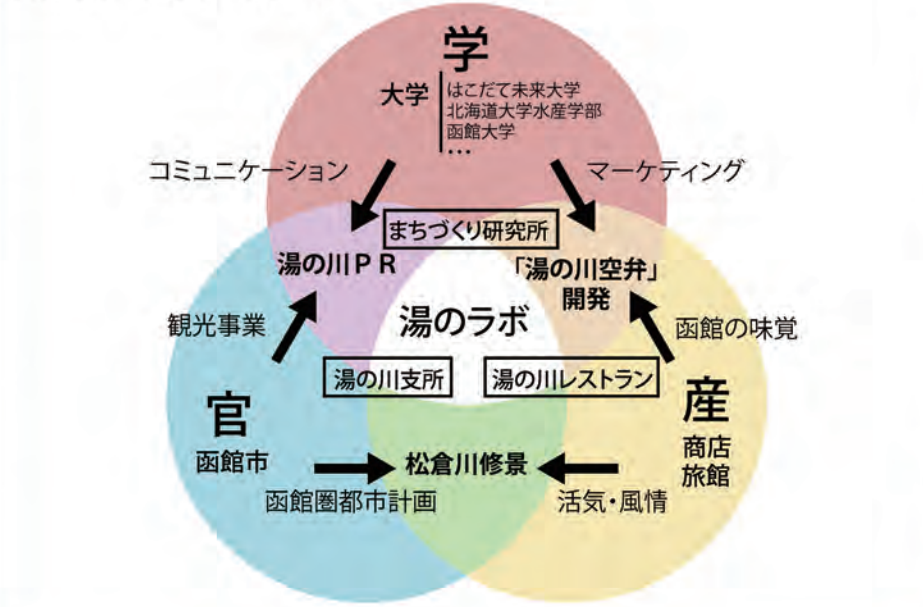
### 3) ひろめる：湯の川から独自の発信

再発見された味覚という魅力を「空弁」により、全国にとどける。そして、湯の川を元町、五稜郭につづく魅力あるまちへと発展させる。

## ■秋・冬の来函観光客数



## ■湯の川を再生する産×官×学の関係



### 学×官

#### 湯の川PR

中心地に活気をとりもどすため学生、が主体となったイベントを函館市電沿いでおこなう。湯のラボで普段親しまれている味覚や市民サークルの成果をフリーマーケットで販売する。また、市電の車内でも利用し、賑わいを元町・五稜郭といった離れたまちにも届ける。

### 産×産

#### 「湯の川空弁」開発

湯の川の豊富な交通網を生かし、「空弁」の開発を旅館と学生との共同により行う。漁火通を利用してイカやマグロの海産物を、産業道路を利用して山菜や農作物を一年通してあつめ空弁につめる。それは、隣接する函館空港から全国にむけて発信される。

### 官×学

#### 松倉川修景

函館市の都市計画により、湯の川の河川改修が10年以内に行なわれることが決定している。そこで、河川改修にあわせ、松倉川・鮫川に、かつての景勝地の姿をよみがえらせる。函館空港から、いちど湯の川い立寄り、散策する観光客の増加が期待される。



- ### 凡例
- 旅館
  - 公共施設
  - 空き店舗
  - 修景計画
  - ゆのかわ散歩道
  - ひとの移動
  - モノの移動



産×官×学

## 湯のラボ

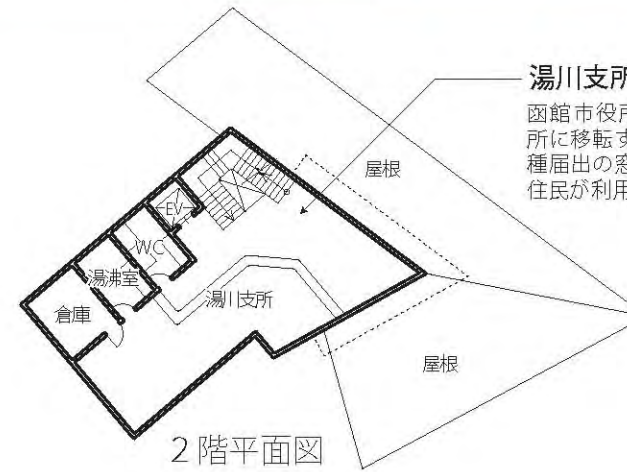
湯のラボは「湯の川」と「ラボ（研究所）」を掛け合わせた造語です。湯の川の市民、旅館のひとたち、学生みんなが集まり、湯の川の魅力を発見、研究、提案する施設です。

- 3F まちづくりラウンジ
- 2F 湯川支所
- 1F 湯の川レストラン  
まちづくりホール

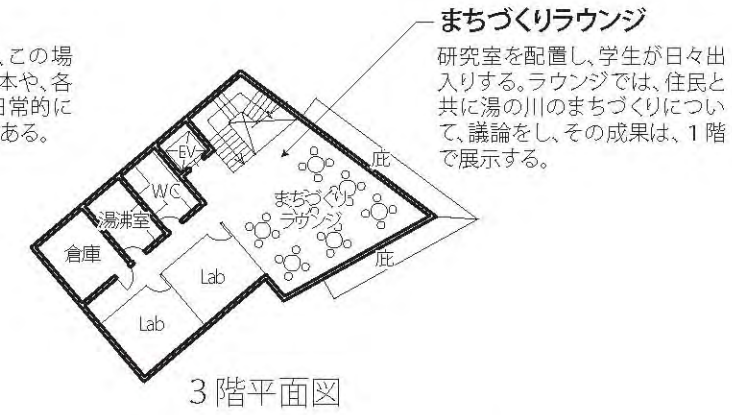


**まちづくりホール**  
2階のまちづくりサロンで研究された成果を、地域住民に向けて展示し、湯の川のまちづくりを住民の理解を得ながらすすめる。

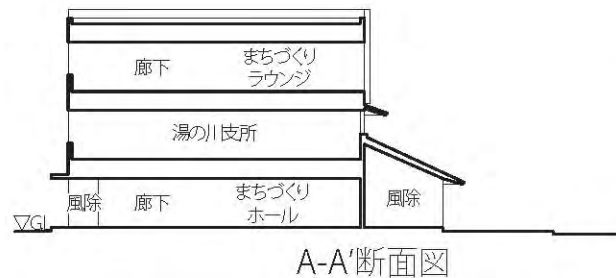
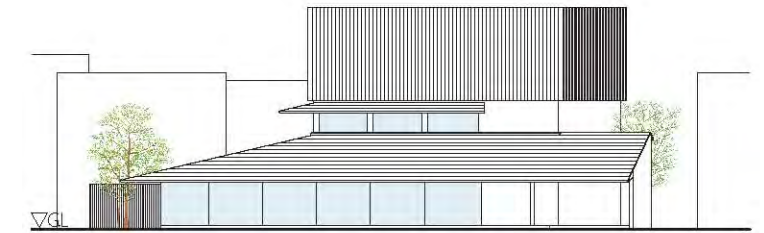
**湯の川レストラン**  
各旅館が、日替わりで料理を提供するレストラン。観光客にたいしてだけでなく、地域住民にたいしてもみられている。



**湯川支所**  
函館市役所の支所を、この場所に移転する。戸籍謄本や、各種届出の窓口として、日常的に住民が利用する場所である。



**まちづくりラウンジ**  
研究室を配置し、学生が日々出入りする。ラウンジでは、住民と共に湯の川のまちづくりについて、議論をし、その成果は、1階で展示する。



建築面積	369.7 m <sup>2</sup>
床面積	1F 272.9 m <sup>2</sup>
	2F 165.6 m <sup>2</sup>
	3F 165.6 m <sup>2</sup>
合計	604.1 m <sup>2</sup>

### 建築概要

構造・規模：RC造（一部鉄骨造）・地上3階  
 外部仕上：屋根 / ガルバリウム鋼板、アスファルト防水  
 外壁 / ガラスカーテンウォール、レンガ積みの上塗喰、コンクリート打ち放し、木質ルーバー  
 内部仕上：床 / フローリング、リノリウムタイル  
 壁 / レンガ積みの上塗喰、PBの上ペンキ（断熱材打込）  
 天井 / ヒバ練り付け合板、木質ルーバー、PBの上ペンキ  
 冷暖房設備：コージェネレーションシステム